

ふくおかAL通信

～県立学校の教室から～

特別号
(H31.2)

福岡県立学校
新たな学び
プロジェクト

「新たな学び」プロジェクト 地区版実践発表会レポート 「新たな学び」を「いつもの学び」へ

福岡県立学校「新たな学び」プロジェクトの地区版実践発表会が11～12月に研究実践校を会場として開催され、研究実践校の公開授業や実践発表等、および参加校によるポスター発表が行われました。

県外の高校や地域の中学校からの参加もあり、「アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善」について活発な意見交流が行われ、明日からの実践に向けた熱意と意欲が溢れる場となりました。



A地区 県立小倉東高等学校 12月6日(木) 研究テーマ「主体的にものごとに関わる生徒を育てる

～論理的に説明する力を育成する授業改善の研究～

午前には小倉東高校のプロジェクトチームから、今年度の取組についての実践発表がありました。プロジェクトの目的や内容について全職員・生徒・保護者で共通理解を図るためのポスターの作成や、創立記念行事での生徒によるプロジェクトの成果の発表、公開授業の実施の工夫等、推進のための具体的な実践が紹介されました。

午後の公開授業では、生徒が調べたことや考えたことを協議、発表する場面がどの科目の授業でも設定されていました。「日本史B」では、違った年代で描かれた地図を適切と考える順序に並べ替え、その根拠を発表することで、ヨーロッパの人々の世界観の変化を考察につなげていました。「グループで協働して考え、発表する学習を通じて生徒の主体性を育む」というねらいが、明確に伝わる授業でした。授業後の研究協議では、参加者によるワークショップ形式の協議が実施され、授業改善に向けて意見交換が盛んに行われました。



公開授業（「日本史B」）

全体会では福岡教育大学の松尾剛准教授から指導・助言をいただき、今後の授業改善に向けて必要な視点として、①学習者の視点で授業を見直す、②アクティブにラーニングする姿とは、③学校以外の場でも生徒がアクティブになるためには、の3点を全体で共有することができました。

B地区 県立直方高等学校 12月3日(月)

研究テーマ「深い学びを誘発する学習手法の工夫」

午前の公開授業では、今年度整備されたALルームやICT機器を活用して「深い学びを誘発する学習手法」を追究するための授業が展開されました。本時の目標達成のために設定された問いに対して「個人→グループ→全体」という活動の流れの中で生徒が主体的・対話的に問題解決に取り組む姿が見られ、学校全体で日々着実に授業改善が進んでいる様子がありました。

午後の実践発表では、今年度の直方高校の取組について、「シンカ」（深化・進化・真化）をキーワードにした発表があり、組織的な



公開授業（「数学A」）

授業改善の取組により職員・生徒の意識改革が進んでいることが伝えられました。

授業の研究協議では、教師の視点・生徒の視点に立って授業の「改善すべき点」と「自分の授業に取り入れたい点」について付箋紙を使って意見を交流し、参加者一人一人が今後の授業改善について考える場となりました。九州工業大学の西野和典教授からは、「これからの教育においては、自ら問いをもち答えを考える人材や、学び続けることができる人材の育成が必要であること」、そのためには「学び方を変えなくてはならないこと」等の総括講評をいただきました。



A Lルームでの研究協議会

C地区 県立光陵高等学校 12月5日（水）

研究テーマ「能動的学習による基礎的・基本的学力の定着のための授業改善」

まず、光陵高校のプロジェクト推進チームから、3年間の取組についての発表がありました。アクティブ・ラーニング型の授業に全職員で取り組んだ成果として、生徒の自己評価の分析から、主体的に学習に取り組むようになったことがうかがわれることや、以前は学年が上がるごとに減っていた家庭学習時間が減らなくなったことなどが紹介されました。

「数学Ⅰ」の公開授業では「図形と計量」の単元において「車椅子スロープを設計しよう」という課題学習が実施されました。日常の事象を取り上げることで三角比を用いる必然性を生み出すという工夫が凝らされていました。前時に個人やグループで考えた内容を書画カメラを用いて発表しました。一人では解決が難しい問題にグループで取り組んだり、全体で考えを共有したりすることで、個人の考えがより深まっている様子が感じられました。研究協議では、日常の事象を数学的に考察している点について、授業改善のヒントが得られたという意見が多く出されました。



研究協議

「英語表現Ⅱ」の授業では、アウトプットの目標提示のもと、電子黒板を効果的に使って「話す活動」が展開されました。評価についてもルーブリックが提示され、生徒は相互評価を行い、次の活動への動機付けとしていました。

福岡教育大学の生田淳一教授は指導・助言の中で、「未来が変わり、誰も正解をもっていない中で、自分の知識を再構築できる人」を育てる、つまり「アクティブ・ラーナー」を育てることの必要性についての話をされました。また、平成27年度からの本県の取組を振り返って、アクティブ・ラーニングが各学校に浸透してきたことへの感慨を述べられました。

D地区 県立朝倉高等学校 12月17日（月）

研究テーマ「ICTの活用と対話・討論による深い学びの創造」

6科目の研究授業が行われ、その他の授業も全て公開されました。プロジェクト型電子黒板（全教室に設置）を活用して板書等を効果的に提示している授業、タブレットPCを用いて個人の考えを深めた上でグループ協議や全体発表・協議で思考力・判断力・表現力等をはたかせる授業等、教科・科目の特性や学習内容に合わせた工夫が見られました。研究協議では、個人で考えを深めるためのタブレット活用、情報を共有するための電子黒板の活用等、目的に応じたICTの活用法や、単元の中でのICT活用の位置付け、授業準備の時間確保等に関する情報交換が活発に行われました。



公開研究授業（「現代社会」）

全体会では、今年度の実践を総括した発表が行われ、ICT活用の取組、調査研究活動等に関する成果と課題が、職員アンケート・生徒アンケートをもとに客観的に述べられました。成果としては、①ICTの活用が全ての教科で推進されたこと、②授業改善により生徒の学力が向上したこと、課題としてはリフレクションの充実が挙げられました。県教育センターの宮原清主任指導主事の講評では、



実践発表

同校の調査研究活動の中心的取組である I F A（インターナショナル・フォーラム・イン・朝倉）について、①調査研究や討論によって思考力・判断力・表現力等を伸ばす有意義な取組であること、②事前・事後指導をいっそう充実させることで「総合的な探究の時間」の中核的な取組へと発展することが期待できること、が述べられました。

E 地区 県立輝翔館中等教育学校

11月29日（木）

研究テーマ「ICT機器を活用したアクティブ・ラーニングによる指導法の深化と評価法の研究」

中学校3教科、高等学校4教科の計7学級の授業が公開されました。どの授業でもタブレットPCや電子黒板等のICT機器が活用されていました。生徒がタブレットPCを使ってプレゼンテーションをする場も設定され、学習ツールの一つとしてICT機器を活用する様子がよくわかりました。公開された全ての授業が3年間の着実な取組の成果がうかがえる内容でした。

全体会では、久留米大学の安永悟教授が「探究力を育てる授業」というテーマで、講演をされました。安永教授が研究されている「協同学習」が体験できるように、講演の中でグループ協議の時間が3回設けられました。各グループは輝翔館中等教育学校の教員と他校からの参加者で編成されており、輝翔館中等教育学校の先生によるファシリテーションによって活発な意見交換が行われました。安永教授は、講演の途中でも参加者からの質問を受けられ、丁寧に回答されました。特に探究学習とその評価についての質問が多く出されました。

公開授業や講演を通して、社会で求められる人材育成のために、生徒にどんな資質・能力を身に付けさせるべきか、そのためにどんな授業を展開すべきかについて参加者が実践の具体的な見通しをもつことができました。



公開研究授業（「数学Ⅰ」）

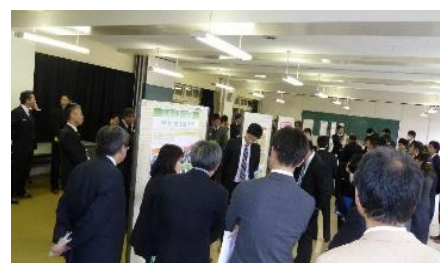


全体会

各会場 ポスター発表

全会場で各参加校が工夫された特色あるポスター発表を行い、授業改善の取組や特色ある授業実践を紹介しました。どの会場でも参加者が熱心に説明に耳を傾けて質問をしたり、他校のポスターを撮影したりする様子が見られました。特に、ICT機器の活用や観点別評価の実施状況、探究学習や課題研究の取組への関心が高く、活発な情報交換が行われました。

参加者からは「近くにある県立学校がどんな取組をしているかがわかってよかった」「もっと詳しく話を聞きたいので、近々学校訪問をしたい」「ポスターにまとめることで自校の授業の在り方について考える良い機会になった」との声が上がっていました。



福岡県立学校「新たな学びプロジェクト」の成果公表について

研究実践校の研究報告および地区別実践発表会で展示された各校のポスターは、「平成30年度 福岡県立学校 新たな学びプロジェクト報告書」（年度末発行予定）に掲載されるとともに、県教育センターのホームページで公開する予定です。

なお、県教育センターのホームページでは、平成27年度からの「新たな学びプロジェクト」の報告書や研究成果物、「ふくおかAL通信」全号も公開していますので、是非御活用ください。